

摂食障害傾向と性役割認知との関連について

— 年齢差の検討 —

古 山 知恵美

【問題と目的】

摂食障害とは、思春期や青年期の女性を中心に「強いやせ願望」と「肥満に対する恐怖」から拒食や過食などの食行動異常を来す疾患である。摂食障害は、他の精神疾患と違って、診断基準はみたさないものの、近い症状や心性をもつ人々の裾野が著しく広いのが特徴である(西園, 2001)。それらを摂食障害傾向と呼ぶが、その「摂食障害傾向」と、疾患とみなされる「摂食障害」の関係については、両者は不連続であるという精神医学的立場と、両者は同一線上にあるとする心理学的・社会学的立場の2つにわかれると考えられる。本研究においては、予防という観点からも後者の立場をとる。

摂食障害はなぜ若い女性に好発するのであろうか。その問いに対して、古典的な精神分析的視点(藤本, 1978; 下坂, 1961)や最近の社会学的視点(浅野, 1996)などの解釈がある。このような様々な立場から見ても、摂食障害は女性性に深く関連しており、斎藤(1986)が名づけるように「女らしさの病」と言うことができよう。したがって、今まで、摂食障害と女性性との関連についての研究は数多く行われてきた。たとえば、Johnson, Brems, & Fischer (1996)がまとめたレビューによると、摂食障害者と健常者との性役割観の違いは明らかにできない、という見解もあるが、性役割タイプは摂食障害に関連しているという研究結果も出ている。その中で、性役割観の過剰説がある一方で、性アイデンティティの欠如が摂食障害の要因であるという見解も存在する。

このように、様々な見解があり一定しない。その理由として、性役割の特性をひとまとめにして男性性・女性性を測っているためであると考えられる。役割の概念は、単一概念ではなく、複合的であり、巨視的概念であることはこれまでたびたび指摘されてきており(飯野, 1984)、概念の整理も試みられているので、区別して扱う必要がある。そこで本研究では、性役割概念を整理して、摂食障害傾向との関連を検討する。側面については、摂食障害は理想像を抱き、それをあくまでも追求するという姿勢が顕著であるということから認知的側面を扱う。次元については、妥当性の確証がなされている2次元モデルを扱う。そして特性については、摂食障害は身体に向かう症状であるので、性役割のうちでも、身体的な特性が重要に関連してくると考えるため、性役割を、身体的特

性と社会的特性にわけて検討する。また、従来の健常者を対象とした摂食障害研究では、発達の視点をいれていないものが多いが、性役割認知は発達段階ごとに異なるという研究結果が出ているため(伊藤, 1992)、本研究では、発達段階として学校段階別に検討する。

よって、本研究では、まず男女別学校段階別の摂食障害傾向の実態を把握し、女性性を身体的特性、社会的特性にわけ、摂食障害傾向の高い人がどのように「女性性」を捉えており、どの程度志向しているのかを、発達段階ごとに検討することを目的とする。研究するにあたって、以下のような仮説をたてた。第2次性徴を迎えた中学女子は女性性の身体的特性に、社会的自立が発達課題となる大学生の女子は女性性の社会的特性に、より葛藤が生じ(意識しやすくかつ受け入れられない)、摂食障害傾向を示すのではないか。(第2次性徴を終え成熟した年齢において、身体的性に固執する人は、より重いのではないか)。あるいは、中学女子は女性性を否定的にとらえており、志向度が低いことが摂食障害傾向に関わっているだろうが、大学生になると、女性性を否定的に捉えておらず志向度もあるのに摂食障害傾向がみられ、その捉え方が摂食障害傾向の低い人と異なるのではないか。

また、男性の摂食障害は女性に比べれば少ないがそれでも増加しているが、研究データが少ないことから、男性においても探索的に検討する。

【方法】

本研究は自己記入式の質問紙調査によって行われた。中学2年、高校2、3年、大学2年以上の男女409名が調査対象とされ、そのうち分析対象は、回答に不備のある者を除く364名であった。調査項目は以下のとおりである。①摂食障害尺度; 日本語版EAT-26 (Eating Attitudes Test-26)にEDI-2 (Eating Disorder Inventory-2)の「過食」尺度7項目を入れた33項目、②男性性・女性性の捉え方、その望ましさ; “あなたにとって「男性らしさ」「女性らしさ」とはどういったことをさしますか?”という教示に対する自由記述と、それに対する望ましさを6件法で回答してもらった。③自己期待像; 各個人が自己期待像を男性性・女性性にこだわっているかどうか、男性性・女性性と捉えている像の望ましさとギャップがあるのか見るために、自由記述で回答

してもらった。

【結果と考察】

①摂食障害尺度の構造検討について：摂食障害尺度33項目について因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行ったところ、「過食嘔吐因子（ $\alpha = .90$ ）」「食事制限因子（ $\alpha = .87$ ）」が抽出された。そのことから、摂食障害の病型と同様、摂食障害傾向も過食型と拒食型にわかれることが示唆された。ただし、因子間相関では中程度の正の相関（ $r = .60, p < .01$ ）がみられたので、両者は全く異なる状態像ではなく相互に関連しあっていることが示唆された。また、過食型と拒食型に共通する心性と思われた「やせ願望」や「肥満恐怖」は、「食事制限」因子の方に寄与したことから、健常者の拒食傾向は「やせ願望」を伴うダイエット型で、一方過食傾向は、「やせ願望」を必ずしも伴わないストレス発散型であるということが考えられる。また、「他の人は、私がもっと食べるようにと望んでいるようです」「他の人は私のことをやせすぎだと思っています」などといった項目は、どちらの因子にも寄与しなかった。やせ願望や肥満恐怖を伴わないがもともとBMIが低い人は、このような心性をもつ可能性があり、これらの項目は神経性無食欲症者の特性であるが、健常者にとっては摂食障害傾向を示す指標になりえないのではないかと考えられる。摂食障害と摂食障害傾向は連続変数上にあるとの考えのもとでは、摂食障害のスクリーニングテストが摂食障害傾向を測る尺度になりうるが、単純計算をするのではなく、下位尺度ごとに重みづけが必要となってくるかもしれない。

②摂食障害傾向の男女別学校段階別特徴について：2要因分散分析を行った結果、いずれの変数においても、男子より女子の方が高得点を示した。男女別に学校段階ごとの特徴に違いがみられ、女子においては、中学生と高校生との間で拒食型・過食型ともに摂食障害傾向が高まるといった。一方、男子では、高校生になると過食傾向が高まるといった。

③摂食障害傾向と性役割認知との関連：男性性、女性性それぞれ性役割を身体的特性、心理社会的特性にわけて、t検定を用いて摂食障害傾向高群・低群の間で数に差がみられるか検討した。その結果、男子において、中学生と高校生において過食嘔吐傾向と男性性の身体的特性に対する望ましさと間に正の相関がみられた（ $r = .26, p < .05$ ； $r = .67, p < .01$ ）。大学生においてはいずれも有意な相関がみられなかった。摂食障害が高い男子は、

中学生・高校生のとき、男性らしい身体をより望ましいと認知する。よって、男性らしい肉体になりたいがために、食べ過ぎになったり食べ物のことを考えすぎたりする、などといった食行動にこだわる可能性が示唆された。

女子においてさらに分析するために、女性性をさらに細かく分類した。その結果、「女性らしさ」においては、身体的特性は、母体を想起させるふくよかな身体・対男性としての女性のスリムな身体に分類された。そして、心理社会的特性は、母親的役割・対男性としての女性役割・男女共通した役割に分類された。そして、分類それぞれに対する望ましさと摂食障害傾向との相関を調べた結果、大学女子において、ふくよかな身体に対する望ましさと摂食障害傾向との間に負の相関がみられた（ $r = -.43, p < .05$ ）。中学生・高校生は第2次性徴に伴う身体発達の認知にとまどい、摂食障害傾向の程度に関わらず誰もが女性の身体に対して混乱しうるが、大学生になると、身体の成長が一段落するため、女性の身体を受け入れるようになる。そのような中で、摂食障害傾向の高い人は、いまだに脂肪のついた丸みを帯びた女性の身体を望ましく思えない、ということができるであろう。これは、身体的に成熟した年齢である大学生において、身体的性に固執する人は、より摂食障害傾向が高いという仮説を支持する結果となった。そして、その身体的性の内容は、脂肪のついたふくよかな身体をネガティブに思うことであり、一方、スリムな身体を女性らしいと認知し望ましく思っている女子は中学・高校・大学とすべての発達段階に存在し、直接摂食障害傾向とは関連しないといえるであろう。

次に、性役割の観点から摂食障害傾向と自己期待像との関連が検討された。その結果、どの発達段階においても同じようなテーマがみられたが、その割合や内容には差がみられ、さらに摂食障害傾向の高低間の違いは発達段階ごとに異なった。これらに対し先行研究をもとに考察がなされた。

本研究で摂食障害と性役割認知との関連性を検討した結果、性別学校段階別に違いがみられ、性別はもちろん発達の視点も入れて検討する必要性が確認された。ただ、自我同一性形成が未熟であると、女性性を志向しつつも女性イメージの形成が未熟なため葛藤をきたすことが考えられるため（久野，1998）、性役割認知的側面のみでは摂食障害傾向を特徴づけることは不十分であると思われる。よって、自我同一性形成をおさえた上で認知的側面を検討する必要があるのが今後の課題である。